

士師エフタとその娘

エフタは主に誓願を立てて言った。「もしあなたが確かにアモン人を私の手に与えてくださるなら、私がアモン人のところから無事に帰って来たとき、私の家の戸口から私を迎えに出て来る、その者を主のものとしませう。私はその者を全焼のいけにえとしてささげませう。」(士師記 11 : 31)

■はじめに

これは、士師エフタがアモン人との戦いの前に主に誓願を立てたという記事です。その内容は、新改訳聖書では、戦いに勝って無事に家に帰ることができたら、最初に家から出てきてエフタを迎えた人を全焼のいけにえとしてささげると、なっています。

そして、士師記の記事は、この誓願の結果、エフタは自分の娘について「誓願どおりに彼女に行った（おこなった）」(士師記 11 : 39) と続きます。

では、エフタは自分の娘を殺し、その血を祭壇のまわりに注ぎ、遺体を祭壇の上で焼いたのでしょうか。

モーセの律法において、神は人をいけにえにすることを厳しく禁止しました(申命記 18 : 9~10)。そして士師は、別名「さばきつかさ」、すなわちモーセの律法に基づいてイスラエルの人々を裁く司法長官であり、戦いになれば、先頭に立って戦う指揮官でもある立場です。

その士師であるエフタが、このような誓願を立て、思いもかけなかったとはいえ、自分の娘がそれに当たるはめになって、神に誓った手前、仕方なくそれを実行した、というのでしょうか。

結論は、そうではありません。この学びは、フルクテンバウム博士の聖書解説書「士師記・ルツ記」に基づきます。

1. エフタの誓願 (士師記 11 : 31)

(1) ヘブル語聖書を語順もそのまま直訳すると、次のようになる。

このようになるであろう、

外に出て来るものは・それは何でも (アシエル)・外に出て来る・戸口【複数形】

から・私の家の・私に会う、

私が帰るとき・無事に・子たちから・アモン人の、

属するであろう・ヤハウエに、

そして私はそれをささげるであろう・オラーを

(2) キーワードは、2つ。「アシエル」と「オラー」である。まず、アシエルについて。

① アシエルは、関係代名詞。物体、動物、また人についても用いる。

② 新改訳聖書が「者」と訳しているのは、後の記事でエフタの娘が主のものとした結果を見ての訳である。

③ アシエルが物を指しているのか、人を指しているのかは、文脈でわかる。民数記 5 : 10 では「物」と訳されている。モーセの律法で、聖なるささげ物となるのは、家畜の中からは牛・羊・やぎ、鳥であれば山鳩か家鳩、穀物であれば小麦粉、と決まっていて、人はあり得ないから(レビ 1 : 2、10、14、2 : 1)。

- ④ エフタの時代、イスラエル人の家は、通常、1階は4つの部屋に区切られ、外との出入口に近い所は、家畜部屋であった。エフタがこの誓願をしたときに、想定していたのは、自分が家に帰ると、まずどれかの家畜に出会う、その最初の1頭をオラーとして捧げるということである。
- ⑤ もしエフタが家族のだれかを人身犠牲とすることを想定していたら、エフタには一人娘しかいない。妻はこのとき存命であったかは聖書に記録がないのでわからないが、存命だったとしても、家族は妻と娘だけ。この場合、誓願の中の「外に出て来る」「私に会う」という主体は女性になり、誓願のことは、文法上は女性形が用いられるはずである。しかし、原文では男性形が使われており、エフタが家畜の雄を想定していたものと思われる。
- (3) 二つのキーワードは「オラー」
- ① 「全焼のいけにえ」と訳されているが、オラーの本来の意味は、「完全に神にささげられたもの」である。他の捧げ物の場合は、捧げる人はその一部を祭司から返してもらって、食べることができた。オラーでは、それが許されず、すべてが祭壇の上で焼き尽くされた。
- ② エフタがアモン人の戦いから無事帰還して家に帰ったら、最初に家の戸口から出てきてエフタに会ったのは、家畜ではなく、自分のひとり娘であった。これを見たときに、とっさにエフタが思い当たったのは、娘を主のものとしてささげる、すなわち、彼女は霊的なオラーとして、その生涯を処女のまま純潔を保って主の幕屋で仕える女性となる、ということであった。
2. 幕屋において働く女性たち
- (1) 出 38 : 8
- (2) Iサム 2 : 22
3. エフタの嘆きと娘の悲しみ (士師記 11 : 35~38)
- (1) 「ああ、娘よ。あなたはほんとうに、私を苦しめる者となった。私は主に向かって口を開いたのだから、もう取り消すことはできないのだ」・・・エフタがこのように嘆いた理由は、ひとり娘を生涯独身とさせるということは、自分の血筋がこれで絶えることになるため。
- (2) エフタの娘も、「私が処女であることを私の友だちと泣き悲しみたいのです」と言って、2か月間、山々の上で自分の処女であることを泣き悲しんだ。
4. 結果 (士師記 11 : 39)
- (1) エフタは、「誓った誓願どおりに彼女におこなった」。
- (2) その結果、「彼女はついに男を知らなかった」。彼女は生涯、純潔を守り通したと言う記事である。Iサム 2 : 22 に記されたような非行に走った女たちの中には彼女はいなかったという神の確認である。
- (3) 時期的には、エフタの娘がシロにあった幕屋において仕えた時期は、最後の士師であり預言者であったサムエルが幕屋の中で成長していた時期と重なる。神の計画において、エフタの娘が、サムエルが育つ環境のために有益な信仰者として、幕屋で働いていた可能性がある。